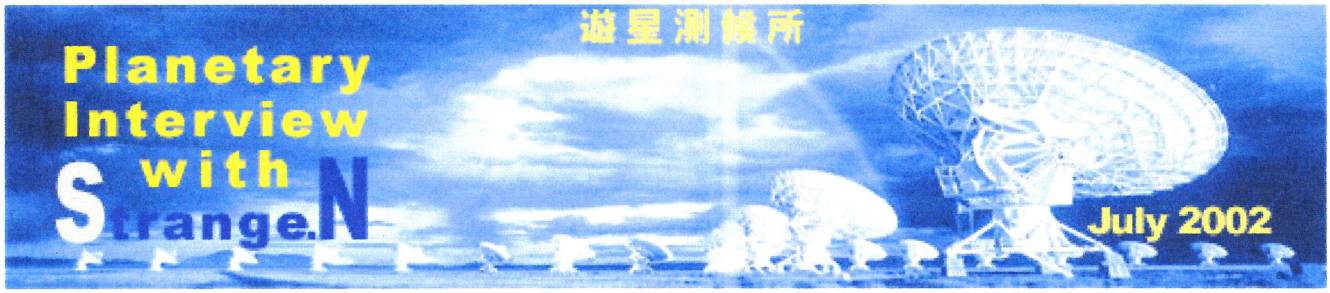


# #06『遊星測候所はいかにして次元の狭間に建てられたか？』

- The making of Planetary Obzervatory

インタビュー/佐藤憲一
文/Ｎｏｂｂｙ
訂正、捏造/ストレンジN

-どうして 遊星測候所というタイトルをつけられたんですか？
まず“遊星”っていうのは？、定まらず漂跟しているものというような…
遊星というのは惑星の別名ですね。★1 天文誌によると、「惑星」より古くから主に関西で使われていた言葉らしく、プラネタリウムを遊星儀（天象儀）と呼んだりしてたらしいです。何故、惑星＝遊星なのかって言うと、地球から見る他の惑星は、地球自身も公転している手前見かけ上の軌道が行ったり来たり不規則なんですね。それが多分、定まらずあたかも遊んでいるように見えたからじゃないかな？と、勝手に思ってます(笑)。
実際の意味はさておき、何よりまず個人的に“遊星”という言葉の響きが好きだったんですよ。「ゆうー」とかっていう、伸びる言葉の響きが。また『ユウセイソッコウショ』と言うと全然濁音がないですよね。濁音が無いということは、語感がさらにキレイですね。ですからまず語感から。

また、誰でもそうですが、何か規制したりされたりすること、そういうのが僕自身の生き方としてあまり、いや、かなり（笑）好きではないんですね。“遊星”という言葉が持つイメージは、何だか透明青の涼しい風が吹き抜けるような、飄として漂う、たゆとうといったような、そういう感じがあって、およそ規制というものすべてから遠い。そういうイメージが大変好き、できるだけそう在りたいという願いも込めてたつもりです。

もう一つは、“遊星”っていう言葉がね、今の40才前後以上の人たちの少年期である、昭和30年～40年代には、割りと見聞きした記憶のある言葉なんですよ。子供のおもちゃとか、プラモデル、キッチュで駄菓子屋的な宝物とかの中に…おりしも日本高度成長期の渦中で、。★2TV黄金時代。国産TVアニメや、★3 海外TVドラマ、特撮ヒーロー番組初期の頃。わりと親しんだ言葉であったと思うし、その頃にいちばん力があった言葉だったと思う訳です。それが底辺にあるんじゃないかな。ガキの頃の刷り込みですね。『遊星測候所』の＃03「タルホVSヌース」のコラムで、「芸術は幼心の完成である」というタルホの言葉を引用したんだけれども、そういったものともオーバーラップするというか…。遊び心っていうのはやっぱりガキの頃に培われるものですから、そういう意味合いも込めていましたね。

特撮番組、★4『遊星王子』国産アニメ ★5遊星仮面』★6『遊星少年パピイ』、当時は、こんな感じで“遊星”が使われたわけです。あと『遊星からの物体X』というのもありましたね。'82年のリメイク版でお馴染みだと思いますが、オリジナル版はこの頃('51)ですね。同じようなイメージで“アストロ”(astro)という言葉もありましたね。アストロノーツというバンドもありましたし。どちらも今は殆ど使われませんけれども。もしかしたら今思えば、来たるべきエレクトロニクス時代、明るい未来(?)イメージを時代に定着させんがための、企業なりの思惑があって現れた言葉なのかもしれないね。

ーだけど、なにせこちらはガキ！　んなこたぁーどーでも良く、勇気ン凛々！秘密基地や探偵団！セカイのヘイワをマモルために日々イソガシイ！、そんなボクラの永遠パスワード！ってな感じがあったわけです。
-色々忙しかしかったんですネ！
そうなんですよ、セカイのヘイワをマモルため！もッ大変だったんだから(笑)。
あと何処かブリキのおもちゃっぽいB級的センスも通じるものがあって、それがまたイイ。そういう意味